

博物館 Dictionary No.241

～あなたに語る・時代を超えて生きる心～

展示中の作品について、研究員がわかりやすく解説します。

仏像のはじまりの伝説

博物館やお寺には、いろんな時代の仏像がありますね。では、仏像はいつ、どうしてつくられるようになったのでしょうか？

これは研究者でも簡単には答えられない難しい問題です。2000 年以上前にインドで釈迦が仏教を開いてから、何百年も仏の姿を具体的に表すことはなかったようです。しかし、1 世紀ごろにマトウラー（インド北部）や、ギリシャ・ローマからの影響を受けたガンダーラ（今のパキスタン北部）でつくられるようになった、という説が有力です。

ただ、研究者がこうした説を唱えるよりも昔から、最初の仏像がなぜつくられたかという問いは、想像をかきたて物語を生みだす源となっていたようです。

「釈迦堂縁起」という、室町時代の絵巻があります。ここで語られているのは、優填王という王様が釈迦の像をつくらせたという伝説です。

古代インドで、釈迦は自分が悟りに至って得た教えをお母さん（摩耶夫人といいます）に伝えたいと思いました。しかしお母さんはすでに亡くなっていて、忉利天という世界に生まれ変わっていたのです。そこで釈迦は忉利天へ行くのですが、そうすると、この現世に正しい教えを説く釈迦がいなくなってしまう。人々は悲しみに沈みますが、とくに苦しんだのが優填王でした。優填王は釈迦を慕うあまり、栴檀といういい香りのする木をつかって、釈迦にそっくりの彫刻をつくらせます(図1)。そして釈迦がいない間、この像を拝んだそうです。これが最初の仏像ということになります。



図1 重要文化財 釈迦堂縁起 伝狩野元信筆 巻第三(部分) 室町時代・永正12年(1515)頃 京都・清凉寺蔵

この伝説は『増一阿含經』という古いお経に書かれていて、日本を含む東アジアに広
がりました。実は、京都の清涼寺というお寺に、この伝説に関係する仏像があるのです。
平安時代に奄然というお坊さんが中国から運んできた釈迦像で、国宝になっています。
清涼寺の釈迦像は日本に来てから 1000 年以上経っているものですから、ある時代には
「最初の仏像そっくりにつくられたものだ」といったり、別の時代には「最初の仏像その
ものだ」といったり、語られる内容が変わることもありました。現在の研究では中国で
つくられた像と考えられていますが、伝説に関係する貴重な像として拝まれてきたことは
ずっと変わりません。



「釈迦堂縁起」では、優填王によってつくられた仏像が、イン
ドから中国へ、さまざまな国を転々として、清涼寺にもたら
された伝説が語られます。この中に、仏教が迫害された国で釈
迦像が壊される危険を感じて、外国に運び出すお坊さんの話が
できます。鳩摩羅琰というこのお坊さん、昼は像を背負って
険しい山道を進みますが(図2右)、夜は暗く危ないですし、
休まなければなりません。すると、なんと釈迦像が
眠る鳩摩羅琰を運んでくれたというのです(図2左)。

太陽に注目!



図2 重要文化財 釈迦堂縁起 伝狩野元信筆 巻第三(部分) 室町時代・永正12年(1515)頃 京都・清涼寺蔵

生きた釈迦の姿を写した最初の仏像に対して、人々は像その
ものが生きてると信じていました。今でも動かないはずの仏
像をじっと見ていると、意思を持ち生きた存在のように感じる
ことがあります。そう感じさせるように仏像をつくるのは、救
い導く仏がこの世に生きて実在してほしいという願いが、最初
の仏像以来受け継がれているからなのかもしれません。

(美術室 井並林太郎)

